

# 『峨山和尚法語』の引用典籍の研究（一）

## 禅研究所『峨山和尚法語』研究班

### はじめに

本研究は、平成二七年度に大本山總持寺にて嚴修された總持寺二祖・峨山韶碩禪師六五〇回大遠忌に関連し、当研究所にて『現代語訳 峨山和尚法語』（大本山總持寺・二〇一六年三月）の發刊に協力したことに由来して行われたものである。

本学における『峨山和尚法語』の研究は、田島柏堂先生以来の伝統があり、書誌学的研究や思想的研究が蓄積されてきたが、未だその中途に留まっている。よって、昨年度の書籍發刊に引き続き、執筆・翻訳作業に関わった研究員が中心となって、本法語についての継続研究を行った。

『峨山和尚法語』の引用典籍の研究（一）（禅研究所『峨山和尚法語』研究班）

今回の成果としては、文中に引用された語句の出典研究を世に問うものである。既に書籍發刊時に際して、部分的な出典研究は行っていたが、今回改めて、曹洞宗総合研究センター宗学研究部門（旧・曹洞宗宗学研究所）の継続研究「道元禪師・瑩山禪師の引用經論・語録の研究」の手法や成果を参考にし、研究を行った。

本研究により峨山韶碩禪師の研究が更に発展し、引いては中世の曹洞宗教団に関する知見が拡大されることを願ってやまない。

なお、各研究員は限られた時間の中で研究作業を行い、また、出典研究の方法には十分に習熟したとはいえない状況での成果發表であるため、ご批判は免れないと思うが、

『峨山和尚法語』の引用典籍の研究(二)(禪研究所『峨山和尚法語』研究班)

諸賢の御法愛によって、ご指導・ご教授賜れば幸いである。

## 凡例

一、本研究は『続曹洞宗全書』『法語』に収録される『峨山紹碩和尚法語集』の内、『峨山和尚法語(二)』『峨山和尚法語(二)』の二篇への出典研究で、凡例・一覧表・対照表から構成されている。

一、一覧表は目次と索引を兼ね、事項名・出典・頁数からなる。

一、対照表は、上段に『峨山和尚法語』の引用箇所、下段に引用典籍の相当箇所を示した。

一、本研究の底本には『続曹洞宗全書』『法語』所収のテキストを元に、長祿四年・禪林書写本を用いて部分的に修正している。

一、引用典籍については、第一出典をa、第二出典をb、参考資料をc、更に時代の前後が判明しない場合には参考として用いる。それぞれの冒頭に略号を付している。

一、本研究で使用した典籍は、以下の通りである。

『峨山和尚法語』は『続曹洞宗全書』『法語』から引

用し、引用時には頁数・段のみ略記した。

『宏智録』は石井修道編『宏智録(上)』(名著普及会・一九八四年)所収の宋版を参照した。巻数は宋版の内容とし、ページ数は書籍に従った。

永平道元の著作は、春秋社『道元禅師全集(全七巻)』を参照。

『伝光録』は『曹洞宗全書』『宗源(下)』所収を参照。

『大正新修大藏経』は「大正〇〇・〇〇〇頁a」等と略記。『正統藏経』は「続蔵〇〇・〇〇〇頁a」等と略記。なお、『大正蔵』『正統蔵』を参照した典籍は、各項目に巻数・頁数等を示している。

※本出典研究は、佐藤悦成先生を班長とし、当研究所の研究員である菅原研州・大橋崇弘・山端信祐が分担して行った。

一 覧 表

『峨山和尚法語（一）』

	事 項 名	出 典	底本の頁数	本書の頁数
①	水ハ竹邊ニ向テ流出テテ緑ナリ、風ハ花裡ヨリ過來テ香シ。	参考『義雲録』	三頁下段	86頁
②	一夜落花雨、満白流水香。	a『統伝灯録』	三頁下段	86頁
③	靈雲カ桃花ヲ見、香巖カ竹ノ響ヲ聞ク	b『大慧録』 c『宏智録』一	四頁上段	86頁
④	夜坐更闌テ眠イマタ到ラス、彌知ル辦道須山林、溪聲入耳月穿眼、此外更無一念心。	a『永平略録』 a『永平広録』卷一〇	四頁上段	86頁
⑤	一物アリ、上天ヲササへ、下地ヲササウ、黒コト漆ノ如シ、常ニ動用ノ中ニ有テ、動用ノ中ニ収コト得ス	b『洞山録』	四頁下段	86頁
⑥	水清シテ底ニ透ル、魚ノ行コト遅遅タリ、空闊シテ涯ナシ、鳥ノ飛コト杳杳タリ	a『坐禅箴』、『宏智録』六	四頁下段	87頁
⑦	人人コレコノ光明アリ、ミントモミヘス、闇昏昏	b『正法眼蔵』「光明」卷	四頁下段	87頁
⑧	露地ノ白牛逐トモ去ラス	b『宏智録』四	四頁下段	87頁
⑨	鴨寒ケレハ水ニ下リ、鶏寒ケレハ樹ニ上ル	b『法演録』中	五頁上段	87頁
⑩	此南臺ニ静坐ス一炉香、巨日凝然トシテ萬事忘ス、息心ヲ除クハ是ナラス妄想、都縁無事ニシテ商量スベシ。	a『景德伝灯録』卷二四「青原行思章」	五頁上段	87頁
⑪	通玄峯頂是人間ニアラス、心外ニ法ナシ、満目ノ青山	a『法眼録』	五頁上段	88頁
⑫	水冷シテハ魚物ヲクワス、月明ニシテ碧潭ニ影ナシ	参考『如浄統語録』	五頁上段	88頁
⑬	末期ノ一句牢關ニイタル、要津ヲ把斷シテ凡聖ヲ通セス	a『圓悟録』一〇	五頁下段	88頁

『峨山和尚法語』の引用典籍の研究（一）（禅研究所『峨山和尚法語』研究班）

『峨山和尚法語』の引用典籍の研究（二）（禪研究所『峨山和尚法語』研究班）

<p>⑭ 虚凝圓照ニシテ、四大五蘊ヲ透リ出、因縁未和合、六根トイマタ成就セス、胞胎未包セス、情識イマタ流サル時、此眼ヲ得ハ、何ゾ悟ラサルコトヲ愁ヘン、カクノ如ク悟ルト時、祖師ノ鼻孔、衲僧ノ命脈ヲ收ムルコトモ得タリ、ユルスコトモ得タリ、唯我ニ自由ノ三昧アリ、ウヘニ云、妄ヲ休レハ寂生ス、寂生スレハ智即アラハル、智生スレハ寂自滅ス、了了トシテ唯眞ノ出家ニアラス</p>	<p>a 『宏智録』四</p>	<p>五頁下段</p>	<p>88頁</p>
<p>⑮ 萬法本ヨリ全體アラハル、</p>	<p>b 『人天眼目』卷二</p>	<p>六頁上段</p>	<p>88頁</p>
<p>⑯ 歴歴トシテ妙存シ、靈靈トシテ獨照ス</p>	<p>a 『宏智録』四</p>	<p>六頁上段</p>	<p>89頁</p>
<p>⑰ 其レ有ト名クヘカラス、トケトモ更ニヒスラカス、豈は無ト云ヘケンヤ、其思議ノ心ヲ出テ、遙ニ影像ノ跡ヲハナレタリ、月ノ如ク、身ハ雲ニ似タリ、所ニ隨アラハレ、物ニ應シテソムカス、塵ニ入トモ混セス、一切ノ諸空ヲ照シテ、無差別ノ境ニ入りヌレハ、</p>	<p>b 『宏智録』四</p>	<p>六頁上段</p>	<p>89頁</p>
<p>⑱ 未容擬議資主歴然</p>	<p>c 『臨濟録』</p>	<p>六頁上段</p>	<p>89頁</p>
<p>⑲ 瓶中ニハ鵝ト云タル</p>	<p>c 『景德伝灯録』卷一〇</p>	<p>六頁上段</p>	<p>89頁</p>
<p>⑳ 一翳眼ニ有ハ空花亂墜スト</p>	<p>b 『景德伝灯録』卷一〇「福州芙蓉山靈訓禪師章」</p>	<p>七頁上段</p>	<p>89頁</p>
<p>㉑ 一劫受生ノ骨山ヨリ高シ</p>	<p>c 『雜阿含經』卷三二 c 『大般涅槃經』卷二二</p>	<p>七頁上段</p>	<p>90頁</p>
<p>㉒ 悟性論ニ云、十方皆以テ無心、不見捨心名爲見、捨心不怪名大布施、離諸動定名大坐禪。</p>	<p>b 『少室六門』「第五門・悟性論」</p>	<p>七頁下段</p>	<p>90頁</p>
<p>㉓ 直ニ休スルヲ、八識田中下一刀ト云ナリ。</p>	<p>参考『常光国師語録』</p>	<p>七頁下段</p>	<p>90頁</p>

## 『峨山和尚法語(一)』

	事項名	出典	底本の頁数	本書の頁数
①	鏡ハ金殿ノ燭ヲ分ツ。	a 『禪林僧宝伝』卷一「洞山聡禪師」	八頁上段	90頁
②	山ハ月樓ノ鐘ニ答ウ。	a 『禪林僧宝伝』卷一「洞山聡禪師」	八頁上段	91頁
③	縁ニ對セスシテ照ス、	a 『坐禅箴』、『宏智録』六	八頁下段	91頁
④	事ニ觸レスシテ知ル、	a 『坐禅箴』、『宏智録』六	八頁下段	91頁
⑤	空闊シテ際ナシ、鳥飛テ杳杳タリ、水清シテ底ニトヲル、魚行テ遲遅タリ。	a 『坐禅箴』、『宏智録』卷六	八頁下段	91頁
⑥	許老胡知不許老胡會、	a 『無門関』第九則・本則	八頁下段	91頁
⑦	無門關ニ、凡夫若知即聖人、聖人若會セハ即凡夫ト、云云、	a 『無門関』第九則・本則	八頁下段	91頁
⑧	代語云、勞而無功、	a 『雲門広録』中	八頁下段	91頁
⑨	萬像之中獨露身、	a 『宏智録』二、頌古六四則・本則	八頁下段	92頁
⑩	塵塵獨立ノトキ、全三昧ナリ、此ノ時コソ萬像之中獨露身ヨ、僧雲門二問、如何是塵塵三昧、門云、鉢裡飯、桶裡水、	a 『宏智録』二、頌古九九則・本則	八頁下段	92頁
⑪	又別ノ古則ニ云、畢竟十五日已前不問、汝十五日已後道將來ト、	a 『碧巖録』第六則・本則	八頁下段	92頁
⑫	森羅萬象、草芥人畜、著著全ク自己ノ家風ヲアラハス、	a 『碧巖録』第六則・本則	八頁下段	92頁
⑬	黄龍新和尚云、鷺倚雪巢中有異、鳥投黑馬、異中有同、黄龍老師雖佗宗、甚得吾家之妙、還辨得金鷄啄破琉璃印、玉兔揜開碧海門、	a 『宏智録』一	九頁上段	92頁
⑭	宏智上堂云、同中有異、功モ位ニ就ク、	a 『宏智録』一	九頁上段	92頁
⑮	サルホトニ異中ト云、同アリハ同上堂云、異中有同、在位借功、	a 『宏智録』一	九頁下段	93頁
⑯	薪ハ薪ノ位ニ在テ、前後際斷シ、灰ハ灰ノ位ニアテ、前後際斷ス、	b 『正法眼蔵』「現成公案」卷	一〇頁上段	93頁

『峨山和尚法語』の引用典籍の研究(一) (禅研究所『峨山和尚法語』研究班)

『峨山和尚法語』の引用典籍の研究(二)(禪研究所『峨山和尚法語』研究班)

17	生也全機現、死也全機現、	a	『圓悟録』	一〇頁上段	93頁
18	故二云、生死去來眞實人體ト、	a	『正法眼藏』「身心學道」卷	一〇頁上段	93頁
19	生也不道、死也不道、即是生死ノ根源ナリ、漸源親ク至トモ知ス、	b	『碧巖録』第五五則・本則	一〇頁上段	93頁
20	如何是生死根源、須知雲外千峯上、别有靈松帶露寒、	a	『投子録』	一〇頁下段	93頁
21	洞山和尚興平ニ至テ即禮拜ス、興平ノ云、老朽ヲ禮スルコトナカレ、洞山云、老朽ニアラサル物ヲ禮ス、興平云、彼又禮ヲ請ス、洞山云、彼又曾禮セス、	b	『宏智録』三	一〇頁下段	94頁
22	雲岩ヒトリノ尼ニ問ウ、汝父アリヤ、尼云、アリ、雲岩云、年イクソハクソ、尼云、八十、岩云、汝是父ノ八十ナラサルアリヤ否、尼云、是恁麼ニ來ルモノニ非スヤ、岩云、猶是兒子ナリ、洞山云、直是恁麼ニ來ラサルモ、又是兒孫ナリ、	b	『洞山録』	一〇頁下段	94頁
23	洞山和尚病アリ、僧問、和尚病ス、又病セサル物アリヤ、山云、アリ、僧云、病セサルモノ又和尚ヲ見ヤ、山云、老僧彼ヲ見ルニ分アリ、僧云、和尚是ヲ見ヤ如何、山云、即病者アリト見ス、宏智禪師云、既ニ病アリト見サレハ、即死アリト見ス、又生アリト見ス、又老アリト見ス、四相モウツスコトアタワス、三世モ轉スルコトアタワスト云ヘリ、	a	『宏智録』一	一〇頁下段	94頁
24	圓悟禪師又云、生也全機現、死也全機現、不道復不道、箇中無背面、	a	『圓悟録』	一〇頁下段	95頁
25	又生モ一時ノ位、死モ一時ノ位、	a	『正法眼藏』「現成公案」卷	一一頁上段	95頁
26	兔馬ニ角アリ、牛羊ニ角ナシ、絶毫絶釐、如山如岳、	a	『碧巖録』第五五則・頌古	一一頁上段	95頁
27	進山主、修山主ニ問テ云、明明生ハ是不生ノ法トシル、何ニトシテカ生死ノ所流ヲ蒙ラン、修山主云、筍ハ畢竟シテ竹トナル、今幾ニナシテ仕コトモ得テンヤ、進山主云、汝向後ニ自悟タラン、修山主云、某カ所見ハカクノ如シ、上座ノ意旨如何、進山主云、是ハ此レ監院ノ房、カレハコレ典座ノ房、修山主即禮謝ス、	c	『宏智録』二、頌古七〇則・本則	一一頁上段	95頁

④④	人所不見ノ語ト一般ナリ、常思破龜墮	c	『碧巖録』第九六則・頌古及び頌古への著語	一三頁下段	99頁
④③	木佛不渡火燒却了、燒却シテ後ハ唯我能知ルカ、是ハ唯獨自明了、餘	b	『圓悟録』第九四則・頌古への評唱	一三頁上段	98頁
④②	人從橋上過。橋流水不流	a	『碧巖録』第九六則・頌古への評唱	一三頁上段	98頁
④①	傳大士力頌ニ云、空手把鋤頭、步行騎水牛	a	『碧巖録』第九六則・頌古への評唱	一三頁上段	98頁
④①	捉賊捉賊、黑地ニ二僧ニ逢著ス、云、捉得也、捉得也、コノ黑處ハ何處ソ	a	『碧巖録』第九六則・頌古への評唱	一二頁上段	98頁
③⑨	纔ニ首ヲ回ス、便方丈ニカヘル	a	『碧巖録』第九六則・頌古への評唱	一二頁上段	98頁
③⑧	人來訪紫胡、紫胡ノ事故ヲ引ハ、新到ヲ見テ便喝シテ云、狗ヲ看、僧磨云、與汝安心竟	a	『碧巖録』第九六則・頌古への評唱	一二頁上段	97頁
③⑦	心未安、乞師安心、磨云將心來、與你安、祖ノ云、覓心不可得ナリ、	a	『碧巖録』第九六則・本則への評唱	一二頁下段	97頁
③⑥	天下醫人ヲ覓テ、猪ノ左膊ノ上ヲ炙ス	a	『碧巖録』第九六則・本則への評唱	一二頁上段	97頁
③⑤	懷州牛喫禾、益州馬腹脹	a	『碧巖録』第九六則・本則への評唱	一二頁上段	97頁
③④	浸爛鼻孔、タタレヘキナリ	a	『碧巖録』第九六則・頌古への著語	一二頁上段	97頁
③④	趙州ハ三佛ヲ示ス、末後ニ還テ云、眞佛屋裡ニ座スト	a	『碧巖録』第九六則・本則への評唱	一二頁上段	97頁
③③	舉、趙州ノ三轉語、說破云、三段不同	a	『碧巖録』第九六則・本則	一二頁上段	97頁
③②	一喝不作一喝用	a	『臨濟録』第九六則・本則	一一頁下段	96頁
③①	探竿影草入陰界、一點不來賊身自敗	b	『人天眼目』卷一	一一頁下段	96頁
③①	壽スレハ窠白ヲナシ、差ヘハ顧佇ニヲツ	b	『人天眼目』卷三	一一頁下段	96頁
②⑨	踞地師子本無窠白顧佇之間即成滲漏	b	『寶鏡三昧』、『洞山録』	一一頁下段	96頁
②⑧	臨濟大師建立四賓主	a	『林間録』上	一一頁下段	96頁

『峨山和尚法語』の引用典籍の研究(二)(禪研究所『峨山和尚法語』研究班)

63	不知誰入蒼龍窟	a	『碧巖録』第九九則・頌古	一六頁上段	102頁
62	師曰。盲人撫地	b	『続伝灯録』卷一三	一五頁下段	102頁
61	三千刹界夜沈沈トシテ	a	『碧巖録』第九九則・頌古	一五頁下段	102頁
60	頌ニ鐵鎚一黄金ノ骨	a	『碧巖録』第九九則・頌古	一五頁下段	101頁
59	莫認自己清淨ノ法身逐ナリ、	a	『仏祖歴代通載』卷一三	一五頁下段	101頁
58	化度利生ノ體ナリ	b	『胎蔵界三部秘釈』	一五頁下段	101頁
57	十身調御ト云ハ、他受用ノ身	b	『碧巖録』第九九則・本則への評唱	一五頁上段	101頁
56	何故萬法皆出於自心、一念是靈ナリ、	a	『碧巖録』第九七則・本則への評唱	一五頁上段	101頁
55	唯佛與佛ノ境界、衆生凡夫更ニ無キナリ、	b	『未決答釋』	一五頁上段	101頁
54	學、肅宗帝問忠師ニ云、如何是十身調御、師云、檀越踏毘盧頂上行、	a	『碧巖録』第九九則・本則	一五頁上段	100頁
53	自家一念發スル底ノ心、是功德ト、	a	『碧巖録』第九七則・本則への評唱	一五頁上段	100頁
52	胡來レハ胡現シ、漢來レハ漢現ス、森羅ノ萬象、一切ノ所有顯現ス、	a	『碧巖録』第九七則・頌古への評唱	一四頁下段	100頁
51	コノ時、青青翠竹盡眞如一、	a	『碧巖録』第九七則・本則への評唱	一四頁下段	100頁
50	雪上加霜又一重、湯如消水	a	『碧巖録』第九七則・本則への著語	一四頁下段	100頁
49	學金剛經云、若爲人輕賤	a	『宏智録』二	一四頁上段	100頁
48	方ニ知ル辜負我、只是未得拄杖子在	a	『碧巖録』第九六則・頌古への評唱	一四頁上段	99頁
47	石人機似汝、也解唱也歌	a	『碧巖録』第九六則・頌古への評唱	一三頁下段	99頁
46	汝本博士合成、靈從何來、聖從何起	a	『碧巖録』第九六則・頌古への評唱	一三頁下段	99頁
45	カマノ神、天生テ謝ラ成ス、師云、汝カ本有ノ性、吾カ強テ言ニ非ス、神再拜没ス	a	『碧巖録』第九六則・頌古への評唱	一三頁下段	99頁
44 <sub>2</sub>		a	『妙法蓮華經』卷六「法師功德品」		99頁



81	一著不到處、滿盤空用心時如何	a 『信心銘拈古』、『真歇清了禪師語錄』卷二	一八頁上段	105頁
80	甚逢敵手不藏行時如何、	c 『天眼目』卷六	一七頁下段	105頁
79	布袋和尚偈云、彌勒真彌勒、分身千百億、時時示時人、時人曾不識	a 『宏智錄』二	一七頁下段	104頁
78	蓮花未出水時如何、菡萏滿地流、	a 『宏智錄』二	一七頁上段	104頁
77	懷州牛喫朱、益州馬腹脹、天下貧醫人、彘猪左膊上、	a 『碧巖錄』第九六則・頌古への評唱	一七頁上段	104頁
76	雁唳長天	a 『金剛經註』卷中	一七頁上段	104頁
75	頌二云、山堂靜夜坐無言、寂寂寥寥本自然、何時西風動林野、一聲寒	a 『金剛經註』卷中	一七頁上段	104頁
74	看看頑石動也、	a 『碧巖錄』第二五則・頌古への評唱	一七頁上段	104頁
73	莫守寒岩異草青、坐看白雲宗不妙、	a 『碧巖錄』第二〇則・頌古への評唱	一七頁上段	103頁
72	心月孤圓光吞萬象、	a 『碧巖錄』第二〇則・頌古への評唱	一六頁下段	103頁
71	三更月落照寒潭、	a 『碧巖錄』第二〇則・本則への著語	一六頁下段	103頁
70	學、僧問巴陵、如何是吹毛劍、陵云、珊瑚撐著月、光吞萬象、	b 『碧巖錄』第二〇則・本則及び本則への著語	一六頁下段	103頁
69	對面無私モ者、人二長短異ナリトイヘトモ、	b 『碧巖錄』第二〇則・垂示	一六頁上段	103頁
68	非因非果是名佛性	b 『大般涅槃經集解』卷五四	一六頁上段	103頁
67	經云、涅槃無因而體是果	a 『大般涅槃經』卷二八	一六頁上段	102頁
66	學人纖毫モ修學ノ心ヲ起サシ	a 『碧巖錄』第九九則・本則への評唱	一六頁上段	102頁
65	安山ノ松、鬱鬱名松ト一般ナリ	参考『南院國師語錄』下	一六頁上段	102頁
64	飢來レハ飯ヲ喫シ、困來レ報化ノ二佛ハ打眠シテ	b 『碧巖錄』第七四則・本則への評唱	一六頁上段	102頁

『峨山和尚法語（一）』

① 水ハ竹邊ニ向テ流出テテ緑ナリ、風ハ花裡ヨリ過來テ 参考 水自竹邊流出緑。風從花裡過來香。『義雲録』大正  
香シ（三頁下段） 八二・四六五 b

② 一夜落花雨、満白流水香（三頁下段） a 一夜落花雨満城流水香 『続伝灯録』大正五一・六七  
七 a

③ 靈雲カ桃花ヲ見、香巖カ竹ノ響ヲ聞ク（四頁上段） b 靈雲見桃華悟道。香巖聞擊竹明心。『大慧録』大正四  
七・八四三 a

c 香巖擊竹響而明心。靈雲見桃花而悟道。『宏智録』  
一、三八頁

④ 夜坐更闌テ眠イマタ到ラス、彌知ル辦道須山林、溪聲 a 夜坐更闌眠未至、弥知弁道可山林、溪声入耳月穿眼、  
入耳月穿眼、此外更無一念心（四頁上段） 此外更無一念心。『永平略録』、『全集』五、一一八頁

※『永平広録』一〇一偈頌一〇一、『全集』四、二八  
八頁

⑤ 一物アリ、上天ヲササへ、下地ヲササウ、黒コト漆ノ b 有一物。上拄天下拄地。黒似漆。常在動用中。動用中

如シ、常ニ動用ノ中ニ有テ、動用ノ中ニ収コト得ス  
(四頁下段)

收不得。『洞山録』 大正四七・五一一 a

⑥ 水清シテ底ニ透ル、魚ノ行コト遲遅タリ、空闊シテ涯  
ナシ、鳥ノ飛コト杳杳タリ (四頁下段)

a 水清徹底分。魚行遲遲。空闊莫涯分。鳥飛杳杳 『坐  
禪箴』、『宏智録』六、四六五頁

⑦ 人人コレコノ光明アリ、ミントモミヘス、闇昏昏 (四  
頁下段)

b あるとき、上堂示衆云、人人尽有光明在、看時不見暗  
昏昏、『正法眼藏』「光明」卷、『全集』一、一四二頁

⑧ 露地ノ白牛逐トモ去ラス (四頁下段)

b 作一頭露地白牛。趁也趁不去。『宏智録』四、三〇〇  
頁

⑨ 鴨寒ケレハ水ニ下リ、鷄寒ケレハ樹ニ上ル (五頁上  
段)

b 鑿云。雞寒上樹鴨寒下水。『法演録』中、大正四七・  
六五六 b

⑩ 此南臺ニ静坐ス一炉香、巨日凝然トシテ萬事忘ス、息  
心ヲ除クハ是ナラズ妄想、都縁無事ニシテ商量スベ  
シ。(五頁上段)

a 南臺静坐一爐香。巨日凝然萬事忘。不是息心除妄想。  
都縁無事可思量。『景德伝灯録』卷二四「青原行思  
章」、大正五一・四〇一 b

『峨山和尚法語』の引用典籍の研究(二)(禪研究所『峨山和尚法語』研究班)

- ⑪ 通玄峯頂是人間ニアラス、心外ニ法ナシ、滿目ノ青山  
a 師後有偈云。通玄峯頂。不是人間。心外無法。滿目青山。『法眼録』大正四七・五九一b  
(五頁上段)

- ⑫ 水冷シテハ魚物ヲクワス、月明ニシテ碧潭ニ影ナシ  
参考 夜深水冷魚不餐。滿船虛載月明浮。『如淨續語録』  
(五頁上段) 大正四八・一三五a

- ⑬ 末期ノ一句牢關ニイタル、要津ヲ把斷シテ凡聖ヲ通セス(五頁下段)  
a 末後一句始到牢關。把斷要津不通凡聖。『圓悟録』一〇、大正四七・七五七a

- ⑭ 虚擬圓照ニシテ、四大五蘊ヲ透リ出、因縁未和合、六根トイマタ成就セス、胞胎未包セス、情識イマタ流サル時、此眼ヲ得ハ、何ソ悟ラサルコトヲ愁ヘン、カクノ如ク悟ルト時、祖師ノ鼻孔、衲僧ノ命脈ヲ收ムルコトモ得タリ、ユルスコトモ得タリ、唯我ニ自由ノ三昧アリ、ユヘニ云、妄ヲ休レハ寂生ス、寂生スレハ智即アラハル、智生スレハ寂自滅ス、了了トシテ唯眞ノ出家ニアラス(五頁下段)  
a 虚擬圓照。透出四大五蘊。與因縁未和画像合。根門未成就。胞胎未包裹。情識未流浪時。著得箇眼。何患不了。恁麼了時。祖師鼻孔。衲僧命脈。把定放行。在我有自由分。所以道。妄息寂自生。寂生知則現。知生寂自滅。了了唯眞見。『宏智録』四、三二四頁

- ⑮ 萬法本ヨリ全體アラハル、(六頁上段)

b 萬法泯時全體露。『人天眼目』卷二、大正四八・三〇

⑩ 歴歴トシテ妙存シ、靈靈トシテ獨照ス（六頁上段）

a 歴歴妙存。靈靈獨照『宏智録』四、三一〇頁

⑪ 其レ有ト名クヘカラス、トケトモ更ニヒスラカス、豈

b 不可名其有。磨之不混。不可名其無。出思議之心。離

は無ト云ヘケンヤ、其思議ノ心ヲ出テ、遙ニ影像ノ跡ヲハナレタリ、月ノ如ク、身ハ雲ニ似タリ、所ニ隨アラハレ、物ニ應シテソムカス、塵ニ入トモ混セス、一切ノ諸空ヲ照シテ、無差別ノ境ニ入りヌレハ、（六頁上段）

影像之迹。空其所存者妙。妙處體得靈。靈處喚得回。心月身雲。隨方發現。直下沒蹤迹。隨處放光明。應物不乖。入塵不混。光明。應物不乖。入塵不混。透出一切礙境。『宏智録』四、三一〇頁

⑫ 未容擬議賓主歷然（六頁上段）

c 未容擬議主賓分『臨濟録』、大正四七・四九七 a

⑬ 瓶中ニハ鵝ト云タル（六頁上段）

c 宣州刺史陸巨大夫初問南泉曰。古入瓶中養一鵝。鵝漸長大出瓶不得。如今不得毀瓶。不得損鵝。和尚作麼生出得。『景德伝灯録』卷一〇「宣州刺史陸巨大夫章」

大正五一・二七九 b

⑭ 一翳眼ニ有ハ空花亂墜スト（七頁上段）

b 一翳在眼空華亂墜『景德伝灯録』卷一〇「福州芙蓉

『峨山和尚法語』の引用典籍の研究（二）（禪研究所『峨山和尚法語』研究班）

山靈訓禪師章」大正五一・二八〇c

⑲ 一劫受生ノ骨山ヨリ高シ（七頁上段）

c 有一人於一劫中生死輪轉、積累白骨不腐壞者、如毘富羅山。『雜阿含經』卷三四、大正二・二四二a  
c 一一衆生、一劫之中所積身骨、如王舍城毘富羅山。『大般涅槃經』卷二二、大正一二・四九六b

⑳ 悟性論ニ云、十方皆以テ無心、不見捨心名爲見、捨心不怪名大布施、離諸動定名大坐禪、（七頁下段）

b 十方諸佛皆以無心、不見於心名爲見佛。捨心不怪名大布施。離諸動定名大坐禪。『少室六門』第五門・悟性論」大正四八・三七一a

㉑ 直ニ休スルヲ、八識田中下一刀ト云ナリ。（七頁下段）

参考 八識田中、下一刀耶。『常光国師語録』大正八一・三九c ※常光国師は臨濟宗の空谷明心（一三二八）一四〇七）のこと。

『峨山和尚法語（一）』

① 鏡ハ金殿ノ燭ヲ分ツ。（八頁上段）

a 鏡分金殿燭『禪林僧宝伝』卷一一「洞山聡禪師」、続蔵七九・五一四b

② 山八月樓ノ鐘ニ答ウ。(八頁上段)

a 山答月樓鐘『禪林僧宝伝』卷二「洞山聡禪師」、統  
藏七九・五一四 b

③ 縁ニ對セスシテ照ス。(八頁下段)

a 不對縁而照『坐禪箴』、『宏智録』六、四五六頁

④ 事ニ觸レスシテ知ル。(八頁下段)

a 不觸事而知『坐禪箴』、『宏智録』六、四五六頁

⑤ 空闊シテ際ナシ、鳥飛テ杳杳タリ、水清シテ底ニトヲ  
ル、魚行テ遲遲タリ。(八頁下段)

a 水清徹底兮。魚行遲遲。空闊莫涯兮。鳥飛杳杳。『坐  
禪箴』、『宏智録』卷六、四五六頁

⑥ 許老胡知不許老胡會。(八頁下段)

a 只許老胡知。不許老胡會『無門闕』第九則・本則、  
大正四八・二九四 a

⑦ 無門關ニ、凡夫若知即聖人、聖人若會セハ即凡夫ト、  
云云。(八頁下段)

a 凡夫若知即是聖人。聖人若會即是凡夫『無門闕』第  
九則・本則、大正四八・二九四 a

⑧ 代語云、勞而無功。(八頁下段)

a 代前語云、勞而無功『雲門広録』中、大正四七・五  
六二 a

『峨山和尚法語』の引用典籍の研究（二）（禪研究所『峨山和尚法語』研究班）

⑨ 萬像之中獨露身、（八頁下段）

a 眼云。萬像之中獨露身 『宏智錄』二・頌古六四則・本則、一〇五〜一〇六頁

⑩ 塵塵獨立ノトキ、全三昧ナリ、此ノ時コソ萬像之中獨露身ヨ、僧雲門ニ問、如何是塵塵三昧、門云、鉢裡飯、桶裡水、（八頁下段）

a 僧問雲門。如何是塵塵三昧。門云。鉢裏飯桶裏水。師云。塵塵三昧。『宏智錄』二、頌古九九則・本則、一一九頁

⑪ 又別ノ古則ニ云、畢竟十五日已前不問、汝十五日已後道將來ト、（八頁下段）

a 舉雲門垂語云。十五日已前不問汝、十五日已後道將一句來 『碧巖錄』第六則・本則、大正四八・一四五c

⑫ 森羅萬象、草芥人畜、著著全ク自己ノ家風ヲアラハス、（九頁上段）

a 森羅萬象。草芥人畜。著著全彰自己家風。『碧巖錄』第六則・頌古評唱、大正四八・一四六b

⑬ 黃龍新和尚云、鷺倚雪巢同中有異、烏投黑馬、異中有同、黃龍老師雖佗宗、甚得吾家之妙、還辨得金鷄啄破瑠璃印、玉兔挨開碧海門、（九頁上段）

a 黃龍新和尚道。鷺依雪巢同中有異、烏投黑馬、異中有同、黃龍老子雖是他宗、甚得吾家之妙、還辨得麼金雞啄破瑠璃印、玉兔挨開碧海門。『宏智錄』一、六八頁

⑭ 宏智上堂云、同中有異、功モ位ニ就ク、（九頁上段）

a 上堂云。同中有異、功亡就位。『宏智錄』一、六八頁



⑮ サルホトニ異中ト云、同アリハ同上堂云、異中有同、  
在位借功、(九頁下段) a 異中有同、在位借功。『宏智録』一、六八頁

⑯ 薪ハ薪ノ位ニ在テ、前後際斷シ、灰ハ灰ノ位ニアテ、  
前後際斷ス、(一〇頁上段) b 薪は薪の法位に住して、さきあり、のちあり。前後ありといへども、前後際斷せり。灰は灰の法位にありて、のちあり、さきあり。『正法眼蔵』「現成公案」卷、『全集』一、三〜四頁

⑰ 生也全機現、死也全機現、(一〇頁上段) a 生也全機現、死也全機現、『圓悟録』卷一七、大正四七・七九三b

⑱ 故ニ云、生死去来眞實人體ト、(一〇頁上段) a 生死去来眞實人體なり。『正法眼蔵』「身心学道」卷、『全集』一、四九頁

⑲ 生也不道、死也不道、即是生死ノ根源ナリ、漸源親ク  
至トモ知ス、(一〇頁上段) b 擧。道吾與漸源至一家弔慰。源拍棺云。生邪死邪。吾云。生也不道。死也不道。『碧巖録』第五五則・本則、大正四八・一八九a

⑳ 如何是生死根源、須知雲外千峯上、别有靈松帶露寒、  
a 須知雲外千峯上。别有靈松帶露寒。『投子録』続蔵七

『峨山和尚法語』の引用典籍の研究(二)(禅研究所『峨山和尚法語』研究班)

⑳ 洞山和尚興平ニ至テ即禮拜ス、興平ノ云、老朽ヲ禮スルコトナカレ、洞山云、老朽ニアラサル物ヲ禮ス、興平云、彼又禮ヲ請ス、洞山云、彼又曾禮セス、（一〇頁下段）

b 上堂舉。洞山到興平使禮拜。平云。莫禮老朽。山云。禮非老朽者。平云。它且不受禮。山云。它亦曾不禮。『宏智錄』三、一八七頁

㉑ 雲岩ヒトリノ尼ニ問ウ、汝力父アリヤ、尼云、アリ、雲岩云、年イクソハクソ、尼云、八十、岩云、汝是父ノ八十ナラサルアリヤ否、尼云、是恁麼ニ來ルモノニ非スヤ、岩云、猶是兒子ナリ、洞山云、直是恁麼ニ來ラサルモ、又是兒孫ナリ、（一〇頁下段）

b 雲巖問一尼。汝爺在。云在。巖曰。年多少。云年八十。巖曰。汝有箇爺。不年八十。還知否。云。莫是恁麼來者。巖曰。猶是兒孫在。師曰。直是不恁麼來者亦是兒孫。『洞山錄』大正四七・五〇八 a

㉒ 洞山和尚病アリ、僧問、和尚病ス、又病セサル物アリヤ、山云、アリ、僧云、病セサルモノ又和尚ヲ見ヤ、山云、老僧彼ヲ見ルニ分アリ、僧云、和尚是ヲ見ヤ如何、山云、即病者アリト見ス、宏智禪師云、既ニ病アリト見サレハ、即死アリト見ス、又生アリトミス、又老アリト見ス、四相モウツスコトアタワス、三世モ轉

a 復舉洞山和尚在疾。僧問和尚病。還有不病者麼。山云有。僧云。不病者還看和尚也無。山云。老僧看他有分。僧云。和尚看他時如何。山云。則不見有病者。師云。既不見有病。則不見有死。亦不見有生。亦不見有老。四相不能遷。三世不能轉。『宏智錄』一、一二頁

スルコトアタワスト云ヘリ、(一〇頁下段)

②4 圓悟禪師又云、生也全機現、死也全機現、不道復不道、箇中無背面、(一〇頁下段)

a 生也全機現。死也全機現。不道復不道。箇中無背面。  
『圓悟錄』大正四七・七九三c

②5 又生モ一時ノ位、死モ一時ノ位、(一一頁上段)

a 生も一時のくらいなり、死も一時のくらいなり。『正法眼藏』「現成公案」卷、『全集』一、四頁

②6 兔馬ニ角アリ、牛羊ニ角ナシ、絶毫絶釐、如山如嶽、(一一頁上段)

a 兔馬有角。牛羊無角。絶毫絶釐。如山如嶽。『碧巖錄』第五則・頌古、大正四八・一八九c

②7 進山主、修山主ニ問テ云、明明生ハ是不生ノ法トシル、何ニトシテカ生死ノ所流ヲ蒙ラン、修山主云、筍ハ畢竟シテ竹トナル、今箴ニナシテ仕コトモ得テンヤ、進山主云、汝向後ニ自悟タラン、修山主云、某カ所見ハカクノ如シ、上座ノ意旨如何、進山主云、是ハ此レ監院ノ房、カレハコレ典座ノ房、修山主即禮謝ス、(一一頁上段)

b 又一日。師問修山主曰。明知生是不生之理。為甚麼為生死之所流。修曰。筍畢竟成竹去。如今作箴使還得麼。師曰。汝向後自悟去在。修曰。某所見祇如此。上座意旨又如何。師指曰。這箇是監院房。那箇是典座房。修即禮謝。『五灯会元』卷八「襄州清谿山洪進禪師」、統藏八〇・一八〇b

c 舉進山主問修山主云。明知生不生性。為什麼為生之所留。修云。筍畢竟成竹。如今作箴使還得麼。進云。汝

『峨山和尚法語』の引用典籍の研究（二）（禪研究所『峨山和尚法語』研究班）

向後自悟在。修云。某甲只如此。上座意旨如何。進云。遮箇是監院房。那箇是典座房。修便禮拜。『宏智錄』二、頌古七〇則・本則、一〇八頁

⑳ 臨濟大師建立四賓主（一一頁下段）

a 臨濟大師建立四賓主 『林間錄』上、統藏八七・二五  
○ c

㉑ 踞地師子本無窠白顧佇之間即成滲漏（一一頁下段）

b 踞地師子本無窠白顧佇停機即成滲漏 『人天眼目』卷三、大正四八・三〇二b

⑳ 壽スレハ窠白ヲナシ、差へハ顧佇ニヲツ（一一頁下段）

b 動成窠白差落顧佇 『人天眼目』大正四八・三二一a  
b 動成窠白差落顧佇 『宝鏡三昧』、『洞山錄』大正四七・五一五a

㉓ 探竿影草入陰界、一點不來賊身自敗（一一頁下段）

b 探竿影草不入陰界一點不來賊身自敗 『人天眼目』卷一、大正四八・三〇二c

㉔ 一喝不作一喝用（一一頁下段）

a 一喝不作一喝用。『臨濟錄』大正四七・五〇四a

③③ 擧、趙州ノ三轉語、説破云、三段不同（一二頁上段）

a 擧。趙州示衆三轉語道什麼。三段不同『碧巖録』第九六則・本則、大正四八・二一九 a

③④ 趙州ハ三佛ヲ示ス、末後ニ還テ云、眞佛屋裡ニ座スト（一二頁上段）

a 趙州示此三轉語了。末後却云。眞佛屋裏坐『碧巖録』第九六則・本則への評唱 大正四八・二一九 a

③⑤ 浸爛鼻孔、タタレヘキナリ（一二頁上段）

a 浸爛鼻孔。無風起浪。『碧巖録』第九六則・頌古への著語 大正四八・二一六 a

③⑥ 懷州牛喫禾、益州馬腹脹（一二頁上段）

a 又杜順和尚道。懷州牛喫禾。益州馬腹脹。『碧巖録』第九六則・本則への評唱 大正四八・二一九 b

③⑦ 天下醫人ヲ覓テ、猪ノ左膊ノ上ヲ炙ス（一二頁下段）

a 天下覓醫人。炙猪左膊上『碧巖録』第九六則・本則への評唱 大正四八・二一九 b

③⑧ 心未安、乞師安心、磨云將心來、與汝安、祖ノ云、覓心不可得ナリ、磨云、與汝安心竟（一二頁上段）

a 心未安。乞師安心。磨云。將心來。與汝安。祖曰。覓心了不可得。磨曰。與汝安心竟。『碧巖録』第九六則・頌古への評唱 大正四八・二二二 c

『峨山和尚法語』の引用典籍の研究(二)(禪研究所『峨山和尚法語』研究班)

- ③⑨ 人來訪紫胡、紫胡ノ事故ヲ引ハ、新到ヲ見テ便喝シテ  
云、狗ヲ看、僧纔ニ首ヲ回ス、便方丈ニカヘル(一二  
頁上段) a 爲什麼却引人來訪紫胡。(中略)凡見新到便喝云。看  
狗。僧纔回首。紫胡便歸方丈。『碧巖錄』第九六則・  
頌古への評唱 大正四八・〇二一九c

- ④⑩ 捉賊捉賊、黒地ニ二僧ニ逢著ス、云、捉得也、捉得  
也、コノ黒處ハ何處ソ(一二頁上段) a 捉賊捉賊。黒地逢著一僧。攔胸捉住云。捉得也捉得  
也。『碧巖錄』第九六則・頌古への評唱、大正四八・  
二一九c

- ④① 傳大士カ頌ニ云、空手把鋤頭、歩行騎水牛(一二頁上  
段) a 又傳大士頌云。空手把鋤頭。歩行騎水牛。『碧巖錄』  
第九六則・頌古への評唱、大正四八・二一九b

- ④② 人從橋上過、橋流水不流(一二頁上段) a 人從橋上過。橋流水不流。『碧巖錄』第九六則・頌古  
への評唱、大正四八・二一九b

- ④③ 菩提本無樹、明鏡又非臺、本來無一物、何處有塵埃  
(一二頁上段) b 菩提本無樹。明鏡亦非臺。本來無一物。何處惹塵埃  
『圓悟錄』大正四七・七七〇a

- b 菩提本無樹。明鏡亦無臺。本來無一物。爭得染塵埃  
『碧巖錄』第九四則・頌古への評唱、大正四八・二一  
七c

- ④④ 木佛不渡火燒却了、燒却シテ後ハ唯我能知ルカ、是ハ  
<sup>④④</sup>唯獨自明了、餘人所不見ノ語ト一般ナリ、常思破竈墮  
 (二三頁下段) c 木佛不渡火(燒却了也。唯我能知)常思破竈墮『碧  
 巖錄』第九六則・頌古及び頌古への著語、大正四八・  
 二一九 c

④④  
 2

a 唯獨自明了 餘人所不見 『妙法蓮華經』卷六「法師  
 功德品」大正九・五〇頁 a

- ④⑤ カマノ神、天生テ謝ヲ成ス、師云、汝カ本有ノ性、吾  
 カ強テ言ニ非ス、神再拜没ス(二三頁下段) a 我乃竈神。久受業報。今日蒙師說無生法。已脫此處。  
 生在天中。特來致謝。師曰。汝本有之性非吾強言。神  
 再拜而沒。『碧巖錄』第九六則・頌古への評唱、大正  
 四八・二一九 c

- ④⑥ 汝本搏土合成、靈從何來、聖從何起(二三頁下段) a 汝本搏土合成。靈從何來。聖從何起。『碧巖錄』第九  
 六則・頌古への評唱、大正四八・二一九 c

- ④⑦ 石人機似汝、也解唱也歌(二三頁下段) a 石人機似汝。也解唱巴歌 『碧巖錄』第九六則・頌古  
 への評唱、大正四八・二一九 b

- ④⑧ 方ニ知ル辜負我、只是未得拄杖子在(二四頁上段) a 方知辜負我。因甚却成箇辜負去。只是未得拄杖子在

『峨山和尚法語』の引用典籍の研究(二)(禪研究所『峨山和尚法語』研究班)

『碧巖録』第九六則・頌古への評唱、大正四八・二二〇 a

④9 舉金剛經云、若爲人輕賤（二四頁上段） a 舉金剛經云。若爲人輕賤。『宏智録』二、一〇四頁

⑤0 雪上加霜又一重、湯如消水（二四頁下段） a 雪上加霜又一重。如湯消水。『碧巖録』第九七則・本則への著語、大正四八・二二〇 a

⑤1 コノ時、青青翠竹盡眞如、（二四頁下段） a 青青翠竹盡是真如。『碧巖録』第九七則・本則への評唱、大正四八・二二〇 b

⑤2 胡來レハ胡現シ、漢來レハ漢現ス、森羅ノ萬象、一切ノ所有顯現ス、（二四頁下段） a 胡來胡現。漢來漢現。萬象森羅。縱横顯現。『碧巖録』第九七則・頌古への評唱、大正四八・二二〇 c

⑤3 自家一念發スル底ノ心、是功德ト、（二五頁上段） a 自家一念發底心。是功德。『碧巖録』第九七則・本則への評唱、大正四八・二二〇 c

⑤4 舉、肅宗帝問忠師ニ云、如何是十身調御、師云、檀越踏毘盧頂上行、（二五頁上段） a 舉。肅宗帝問忠師。如何是十身調御。國師云。檀越踏毘盧頂上行 『碧巖録』第九九則・本則、大正四



八・二二〇c

⑤5 唯佛與佛ノ境界、衆生凡夫更ニ無キナリ、(二五頁上段)      b 若如所言眞言教法唯佛與佛之境界者。『未決答釋』大正七七・八七二c

⑤6 何故萬法皆出於自心、一念是靈ナリ、(二五頁上段)      a 何故。萬法皆出於自心。一念是靈。『碧巖録』第九七則・本則への評唱、大正四八・二二〇c

⑤7 十身調御ト云ハ、他受用ノ身(二五頁上段)      b 十身調御者。即是十種 他受用身。『碧巖録』第九九則・本則への評唱、大正四八・二二二b

⑤8 化度利生ノ體ナリ(二五頁下段)      b 胎藏界化度利生他受法樂行相也。『胎藏界三部秘釈』、大正七八・七四b

⑤9 莫認自己清淨ノ法身逐ナリ、(二五頁下段)      a 陛下莫認自己清淨法身。『仏祖歴代通載』卷一三、大正四九・五九八c

⑥0 頌ニ鐵鎚―黄金ノ骨(二五頁下段)      a 鐵鎚擊碎黄金骨。『碧巖録』第九九則・頌古、大正四八・二二三b

『峨山和尚法語』の引用典籍の研究(二)(禪研究所『峨山和尚法語』研究班)

『峨山和尚法語』の引用典籍の研究(二)(禪研究所『峨山和尚法語』研究班)

⑥1 三千刹界夜沈沈トシテ(一五頁下段)

a 三千刹海夜沈沈。『碧巖録』第九九則・頌古、大正四八・二二三 b

⑥2 師曰。盲人撫地(一五頁下段)

b 盲人摸地『続伝灯録』卷一三、大正五一・五五〇 b

⑥3 不知誰入蒼龍窟(一六頁上段)

a 不知誰入蒼龍窟『碧巖録』第九九則・頌古、大正四八・二二三 b

⑥4 飢來レハ飯ヲ喫シ、困來レ報化ノ二佛ハ打眠シテ(一六頁上段)

b 飢則喫飯。困則打眠。『碧巖録』第七四則・本則への評唱、大正四八・二〇一 c

⑥5 安山ノ松、鬱鬱名松ト一般ナリ(一六頁上段)

参考 寒巖枯木不干春。龍安山下松千樹『南院国師語録』下、大正八〇・三〇〇 a ※南院国師は臨済宗の規庵祖円(一二六一〜一三二三)のこと。

⑥6 學人纖毫モ修學ノ心ヲ起サシ(一六頁上段)

a 古人道。不起纖毫修學心。『碧巖録』第九九則・本則への評唱、大正四八・二二二 c

⑥7 經云、涅槃無因而體是果(一六頁上段)

a 以是義故。涅槃無因而體是果。『大般涅槃經』卷二

⑥8 非因非果是名佛性（一六頁上段）

b 非因非果名爲佛性『大般涅槃經集解』卷五四、大正三七・五四八 b

⑥9 對面無私モ者、人ニ長短異ナリトイヘトモ、（一六頁上段）

b 垂示云。收因結果。盡始盡終、對面無私『碧巖錄』第一〇〇則・垂示、大正四八・二二三 b

⑦0 擧、僧問巴陵、如何是吹毛劍、陵云、珊瑚撐著月、光吞萬象、（一六頁下段）

b 擧。僧問巴陵。如何是吹毛劍。陵云。珊瑚枝枝撐著月光吞萬象『碧巖錄』第一〇〇則・本則及び本則への著語、大正四八・二二三 b

⑦1 三更月落照寒潭、（一六頁下段）

a 三更月落照寒潭。『碧巖錄』第一〇〇則・本則への著語、大正四八・二二三 c

⑦2 心月孤圓光吞萬象、（一六頁下段）

a 心月孤圓。光吞萬象。『碧巖錄』第一〇〇則・頌古への評唱、大正四八・二二三 c

⑦3 コノ時境亦非存、莫處無法、光境俱忘ス、又是何物

a 境亦非存。光境俱亡。復是何物。『碧巖錄』第一〇〇

『峨山和尚法語』の引用典籍の研究（一）（禪研究所『峨山和尚法語』研究班）

『峨山和尚法語』の引用典籍の研究（二）（禪研究所『峨山和尚法語』研究班）  
ソ、（二七頁上段）

則・頌古への評唱、大正四八・二二三 c

⑦4 莫守寒岩異草青、坐看白雲宗不妙、（二七頁上段）

a 莫守寒岩異草青。坐却白雲宗不妙。『碧巖錄』第二五則・頌古への評唱、大正四八・一六六 c

⑦5 看看頑石動也、（二七頁上段）

a 看看頑石動也。『金剛經註』卷中、統藏二四・五四六 b

⑦6 頌云、山堂靜夜坐無言、寂寂寥寥本自然、何時西風動林野、一聲寒雁唳長天（二七頁上段）

a 頌曰。山堂靜夜坐無言。寂寂寥寥本自然。何時西風動林野。一聲寒雁唳長天。『金剛經註』卷中、統藏二四・五四六 b

⑦7 懷州牛喫朱、益州馬腹脹、天下覓醫人、灸猪左膊上、（二七頁上段）

a 懷州牛喫禾。益州馬腹脹。天下覓醫人。灸猪左膊上。『碧巖錄』第九六則・頌古への評唱、大正四八・二一九 b

⑦8 蓮花未出水時如何、菡萏滿地流、（二七頁上段）

a 蓮華未出水時如何。衆云。菡萏滿地流。『宏智錄』二、一二四頁

⑦9 布袋和尚偈云、彌勒眞彌勒、分身千百億、時時示時

a 布袋和尚頌云。彌勒眞彌勒師云。拶破面門。分身千百

人、時人曾不識（二七頁下段）

億。師云。築著鼻孔。時時示時人。『宏智錄』卷二、一四七頁

⑧ 碁逢敵手不藏行時如何、（二七頁下段）

c 碁逢敵手難藏行。『人天眼目』卷六、大正四八・三三

一 c

⑧ 一著不到處、滿盤空用心時如何（二八頁上段）

a 一著不到處。滿盤空用心。『真歇清了禪師語錄』卷二

『信心銘拈古』、統歲七一・七八六 c

## 『峨山和尚法語』の引用典籍について（一）

菅原研州

### 一 引用典籍の総括

今回の研究によって、『峨山和尚法語』二篇における引用文の出典典籍をほぼ明らかにし得たと思う。

そこで、当研究の結果得られた知見と継続して研究されるべき課題を、ごく簡単にまとめておきたい。

まず、これら二篇の仮名法語に引用されている文献のほとんどは、峨山韶碩禪師（一二七六〜一三六六）の在世時には成立していたものであり、不自然なところは極めて少数だったと判断される。だが、本法語が峨山禪師の親撰との確定はできなかつた。それについては、今後も更に研究を要すると思われる。よって、以下は峨山禪師によって提唱されたと仮定して論を進めるものである。

まず、『法語（二）』文中には、明らかに『無門関』と指定した上で、第九則についての提唱が見える。同じく同法語後半には『碧巖録』からの引用が多いが、特に第九六・九七・九九・一〇〇則については、示衆・本則・頌古・評唱・著語の多くを和文に開いて活用されている。何故、この四則がここまで濃密に引用されているのかは更なる研究を要するが、推測を述べることが許されるならば、峨山禪師による『碧巖録』全体への提唱が存在していたのかもしれない。要は現存したのが、偶々この四則分であつたということかもしれない。他の則への言及は、部分的なものも含めれば多く見られるのであるから、『碧巖録』は学人に参究を促していたといえる。そして、これらのことから、峨山禪師門下では、『無門関』『碧巖録』への積極的な参究が始まっていたと理解できよう。

峨山禪師は『無門関』を日本にもたらした心地覚心（一二〇七〜一二九八）の門下である恭翁運良（一二六七〜一三四一）と交流していたともされ、瑩山禪師が大乗寺を去った後、恭翁が後住に入った段階でもまだ、峨山禪師は大乗寺に留まったと考えられているから、『無門関』を所

持し、学んでいたとしても疑問はない。

一方で、『従容録』だと確定できる引用箇所は一箇所もなく、他の二書との相違は明らかである。いうまでもなく『従容録』は、洞上の宗風確立に用いることができそうだが、引用の傾向からすれば、『従容録』は用いられずに、他の文献で洞上の宗風を模索されたといえる。

例えば、中国曹洞宗の祖師として、『洞山録』からの引用が複数見られ、また、僅かながら『投子録』や『信心銘拈古』（真歇清了撰）が見られる。『投子録』は、『洞谷記』に依れば、大智禅師によって瑩山禅師にもたらされたと指摘されるから、峨山禅師も同語録を所持した可能性がある。更に、『信心銘拈古』は、瑩山禅師撰『信心銘拈提』成立の一助になったともされるが、峨山禅師にその活用例が見られても不思議ではない。

そして、大きな影響が見られるのが『宏智録』である。出典としては、宋版の記述と一致している。宏智禅師については義雲禅師への影響や、瑩山禅師による永光寺開堂法語での影響が知られているから、峨山禅師もその流れにあったと見るべきであろう。峨山禅師の法嗣である通幻寂

靈禅師は、『宏智録』十三冊を所持し、遺品にしたことが『通幻寂靈禅師喪記』から知られるが、峨山門下で広く活用されたものと思われる。

また、本法語における「偏正五位説」の受容・展開については、『山雲海月』との関連も含めて改めて研究されるべきである。他にも、『人天眼目』の参照による機関禅の受容については、中世曹洞宗の宗風確立の経緯を促すものとして理解できよう。

それから、道元禅師の著作は『正法眼蔵』について、「現成公案」「身心学道」「光明」巻を典拠と見做しうる。よって、七五巻本か六〇巻本のどちらかを用いていたと判断しうる。峨山門下では『正法眼蔵』を伝授した例（『通幻寂靈禅師喪記』参照。なお、通幻禅師開山の丹波永澤寺には七八巻本が所蔵されるが、『永平正法眼蔵蒐書大成』巻六収録の解題に依れば、同写本は通幻親写と判断されていない）があると知られており、峨山禅師が用いていたと考えても不思議はない。

『永平広録』についても、その引用例があるかどうかを検討したが、『永平略録』と重なる部分は確実に参照され

ているが、いわゆる一〇巻本の『広録』が単独で参照されていたかは不明である。

更に、非常に悩ましいのが、『如浄統語録』からの引用が自然と考えるべき文脈が見られたことである。『如浄統語録』について、今後、慎重に扱う必要を指摘しておきたい。『宏智録』同様に『如浄録』は、通幻禅師の遺品目録に名前が見え、また、『洞谷記』の記述から、永光寺五老峰に『如浄録』が納められたことは、よく知られたことであるから、峨山門下で洞上の宗風を確立しようとして、『如浄録』が活用された可能性はある。しかし、『統語録』については今後の研究を待ちたい。

他にも、『義雲録』(曹洞宗・永平寺五世義雲「一二五三」一三三三)の語録)や『南院国師語録』(臨済宗・規庵祖円「一二六一」一三一一)の語録)や、『常光国師語録』(臨済宗・空谷明応「一二三八」一四〇七)の語録)などとの関連が指摘される。無論、成立年代などに鑑みて、明確に引用されたわけではないだろうが、洞済両門を問わずに、当時の日本の禅門で用いられていた文脈圏に、峨山禅師がいた可能性を指摘するものである。

そして、天台宗を始め、教宗の文献からの影響も見られるが、これは、元々比叡山の僧侶であり、また教禅の宗風の相違を問題にしていた峨山禅師にしてみれば、引用は当然のことである。

## 二 本法語の記録方法について

文脈から既に理解できることではあったが、出典研究を通して、本法語は話者の言葉を、聞者が聞き取った形であると確定できた。元々の漢文を漢字仮名交じり文にしているところは、言うまでもないことだが、例えば以下の事例には注意すべきである。

・雪上加霜又一重、湯如消水。

『法語(二)』第五〇番 『統曹全』「法語」一四頁下段  
この引用の後半部分は、本来の『碧巖録』第九七則では、「如湯消氷」である。しかし、おそらくは話者の言葉をそのまま書いて、「湯」を先に書き、「如」の置くべき箇所を間違えたのである。

他にも、「無情說法」を「無常說法」と記載した例は多く、洞門ではよく知られた同語について、まだ親しめてい



ない学人による記載であるかも知れないと想起させる。

これらの結果、厳密な形で の 出典研究は困難を窮めたが、書き間違い（あるいは、意図的な音通の可能性もあるが）を推定しつつ検討を行い、今回の成果発表へ至ったことを付言しておく。

また、現在まで『法語（一）』『法語（二）』と便宜的に呼んで伝わったものの、実際には数篇の短編の法語を併せたものであるかもしれない。それは、内容が余りに多岐に渡っていることと、法語の前後で提唱の運び方が相違していることが見て取れるためである。

### 三 結論

結論として、本法語は、峨山禪師門下において公案参究が徐々に行われてきた様子を示し、形式としては、特に『法語（二）』では本則に対し「説破云」「代語」「註云」などの用語が見られることから、「洞門抄物」の先駆的一冊として考えられる。

また、内容からは、全体として洞上の宗風を確立しようとする意図があったとして良いと思われる。洞上の宗風確

『峨山和尚法語』の引用典籍の研究（二）（禅研究所『峨山和尚法語』研究班）

立は、主として坐禅観の宣揚、公案解釈の独自性の模索などが指摘できる。日本では両祖の時代に比べて、禅宗が一般化したことも考えれば、他の宗派との差異化を図ろうとした可能性もある。

ただし、それがどのような目的で行われたものか、今後の研究を更に継続する必要がある。それに、前後する時代の他の法語類や、抄物との関連性についても、更に厳密に見ていく必要があることを指摘して、簡単な結論としておきたい。

### 参考文献

- 鏡島元隆『天童如浄禅師の研究』春秋社・一九八三年  
光地英字等編『瑩山禅』全一二巻、山喜房仏書林・一九八五  
一九九四年  
安藤嘉則『中世禅宗文献の研究』国書刊行会・二〇〇〇年  
『通幻寂霊禅師喪記』は『続曹洞宗全書』『清規・講式』所収を参照。